

平泉世界文化遺産推進調査特別委員会会議記録

平泉世界文化遺産推進調査特別委員会委員長 佐々木一榮

1 日時

平成 21 年 1 月 22 日（木曜日）

午前 10 時 03 分開会、午後 0 時 02 分散会

2 場所

特別委員会室

3 出席委員

佐々木一榮委員長、工藤勝子副委員長、伊藤勢至委員、及川幸子委員、
佐々木 博委員、佐々木順一委員、工藤大輔委員、新居田弘文委員、千葉康一郎委員、
大宮惇幸委員、小田島峰雄委員、三浦陽子委員、関根敏伸委員、五日市 王委員、
中平 均委員、菅原一敏委員、高橋昌造委員、喜多正敏委員、高橋 元委員、
郷右近 浩委員、岩渕 誠委員、佐々木大和委員、千葉 伝委員、小野寺研一委員、
柳村岩見委員、樋下正信委員、平沼 健委員、嵯峨耆朗委員、高橋雪文委員、
熊谷 泉委員、小野寺有一委員、吉田洋治委員、飯澤 匡委員、亀卦川富夫委員、
高橋博之委員、工藤勝博委員、小西和子委員、久保孝喜委員、木村幸弘委員、
阿部富雄委員、斉藤 信委員、小野寺 好委員、及川あつし委員

4 欠席委員

菊池 勲委員、高橋比奈子委員、田村 誠委員

5 事務局職員

佐藤主幹兼政務調査担当課長、蛇口主任主査、菅原主査、小原主査

6 説明のために出席した者

中尊寺仏教文化研究所長 佐々木邦世氏

7 一般傍聴者

なし

8 会議に付した事件

(1) 調査

「世界遺産」へどう建て直すのか 待ったなしの平泉

(2) その他

次回の委員会運営について

9 議事の経過概要

○佐々木一榮委員長 ただいまから平泉世界文化遺産推進調査特別委員会を開会いたします。なお、田村誠委員は欠席ですので、御了承をお願いいたします。

これより本日の会議を開きます。本日はお手元に配付いたしております日程により、平泉

文化遺産の世界遺産登録に向けた施策の推進等について調査を行いたいと思います。

本日は、講師として中尊寺仏教文化研究所の佐々木邦世所長をお招きいたしておりますので、御紹介をいたします。佐々木所長の御経歴につきましては、お手元に配付いたしておるとおりでございますので、御覧いただきたいと思います。本日は、「「世界遺産」へどう建て直すのか 待ったなしの平泉」と題しまして、平泉の文化遺産に関する貴重なお話をいただくことになっております。

それでは、これから講師のお話をいただくこととしますが、後ほど講師を交えての質疑の時間を設けておりますので、御了承願いたいと思います。

それでは、佐々木所長、よろしく願いいたします。

○佐々木邦世講師 座って失礼いたします。このような平泉についてお話をさせていただく機会を与えてくださりまして、ありがとうございます。ことしももう20日を過ぎまして、いよいよ3月には改めての世界遺産、その柱を立て直さなければいけない、文化庁はそのような段取りで推薦書作成委員会を進めていらっしゃるようでございます。

御承知のように、去年の世界遺産登録延期という事態を、ただ残念だったとか、やむを得なかったとか、私は前からそう思っていたとか、皆さん勝手なことをおっしゃっているのでございますが、一番私が申し上げたいのは、これまで平泉の我々を全く素通りで、県御当局に問い合せても、一つも何も教えてもらえなかった、そういう行政のすすめ方です。経過を知らず、そしてイコモスのジャガス氏が来たときも、県から、すべて私どものほうでやりますという段取りで進められたので、ちょっと待ってくださいと県に申し入れた。それは違うだろう、こちらへ来たら我々が、毛越寺へ行けば毛越寺の者が、山を見るときには山の者がお話しするのが一番わかっていただけではないか。それで、あと必要な資料の提示であるとか数字的なものについては、どうぞ担当の皆さんのほうで用意されたものをお話しになったらいいでしょうということで、中尊寺境内を見るときには、私どもがその時間をどのように御案内するかお任せくださいという形で進めました。

県のほうで用意されたスケジュールになかったのですが、後で申しますけれども、中尊寺というと金色堂、光っているばかりと思われるかも知れませんが、そうではない。梵鐘があります。あの鐘をつくことが清衡というこの平泉の世紀を開いた人の念願、至願である、ということ、言葉で言うだけではだめです。今、あの鐘はつきません。非常に音響がやわらかくて、余韻が長くて、いい鐘なのですが、鐘がやわらかいために100年、200年ついていて、撞座がもうくぼんでしまっているのです。撞座が四方にありますから、45度ずつ変えて一回りしてしまっただけですから、今毎日つくわけにいかないのです、禁止にして、かぎをかけてありますが、この鐘の響きがみちのくの大地に差別なく平等に響く、そのたびごとに「冤霊をして浄刹に導かしめん」。冤罪の冤です。資料の後ろのほうに写真を載せて字を解説しておきましたが、単なる冤という字ではないのです。あれは、ワ冠の下に「兎」と書いているのです。あのワ冠は、象形文字は網なのです。網をかけられて、もう自由を失ったウサギがぶるぶる震えている。「征（い）けと言われて征（い）かせられ、死ぬと言われて

死なせられる一」戦争の犠牲者をいうのであります。清衡のこの中尊寺建立の趣旨は、そこに新しい言葉をつくった。造語です。わざわざ言葉をつくって、そして国家の文章博士に敦光という方が清衡の素志をうけて、これを四六駢儷体の大変美しい格調高い文章の中ごろにセットして、これを読み上げている。その鐘をジャガスさんに聞かせようではないか、かぎあけてくれと言って、中尊寺一山の了解を得まして、その説明もいたしました。ジャガスさんは大変喜んで、私にもつかせてくれと。初めてのことですから、その場でああこう言っていられませんか、上ってついてもらいました。それで納得されたかなと思ったら、もう一度つかせてくれと。もうここまで来れば2度もいいでしょうと、ついた。さあ、それでは次、いや、もう一度つかせてくれと言うのですね。3回ついたのです。そして、もう十分な意を得た顔されて、それから金色堂の方に向かった。中に入って、スクリーンの中にどうぞお入りください。悪いけれども、文化庁から来た人、県から来た人は御遠慮くださいと。それで中に通訳と中尊寺貫首と執事長が入って、しばらく話していました。

ジャガス氏は型どおりの現地視察ではなくて、歴史の真実、文化の質といいますか、この方は本当のものを求めている、そう思いました。そこに、教育委員会の方や何かが、あとここまで来れば我々にも準備した立場もございまして、説明させてほしいと言うので、説明をしてもらった。それで、中尊寺経については、この紙はどこから輸入して、文化財としての経典を、中尊寺紺紙金字経について説明されたのです。そのときに、ジャガスさんが何と言ったか。全部話を聞いてから、報道関係は全部向こうのほうに離れていましたので、近寄らないようにしていましたので、「あなたは、この経典を読んだことあるのですか。」「いや、私は教育委員会の者ですから読んでいません。」では、結構ですと。お経を読まない人に仏教の話聞いても仕方がないと、そういうきちっとしたものを持っていらした。それで、もう一度私が讃衡蔵の法で経典の説明をしたわけです。本物を、具体的なもので確認しながら歩こうとされていた。

彼ら、ジャガス氏あるいはイコモスの委員会に問題があるのではなくて、英訳以前の日本国の対応が私はおかしいなと思っていました。その後も何度か県と、電話をかけて、あるいは担当の方にお会いして話をしましたが、事態の推移、状況など一切言えませんというのですね。「大丈夫ですから、お任せください。文化庁の指導のもとに着々と、きちんと……」。答えはこれしかないのです。「質問来たそうですね。」「いや、それも答えられない。」もちろんどう答えたかも言えない。いささかこれは、もうちょっと心配だなと思っておりました。きょうは、その内容からお話しいたします。

お手元に配りましたものを見ていただきたいのですが、その質問というのが一昨年12月に来ているのです。指摘は、「浄土思想を基調とする文化的景観」と言っているけれども、推薦資産の全体が浄土思想の教義をどのように明確かつ有形的に反映しているのか、その根拠を詳しく述べなさいという、これが質問の一つです。これに対して、後でわかったのですが、見せてもらえなかった回答が、「源信の「往生要集」初め来迎図によると、浄土思想の教義においては浄土世界の位置、方位を初め、現世との距離を認知する上で自然的景観が

極めて重要一」。これ、具体的ですか、有形的ですか。一般論ですよ。答えになっていないのです、これは。ですから、改めてまた質問されている。これも後でわかったこと。それに対して抽象的な答えをしているのです。どこがどう、あの山がこう、この川がこう、この景観がどうということが浄土と何の関係あるのか、それを具体的に、そして地図の上に根拠を持って述べなければいけないはずですよ。

私は、この「浄土思想」という言葉がある日突然、新聞に推薦書のコンセプトとして出たので、驚いたのです。それは、平成18年6月23日の各紙新聞です。これに「浄土思想を名称に盛り」とか、これは読売でしたが、「作成委方針確認、推薦書原案固める」と。見出しはともかく、みんなこのようにして、平泉の人は、ああ、東京で決まったのだな、委員会でそういうふうになったのだな、と。私は心配になったのは、浄土思想という言葉は多面体でございます。一つの言葉で言い切れるものではありません。一体、委員の先生方は、「浄土」の多岐にわたる深意をわかっているのかな、ということでした。

その1カ月ぐらい後に、その委員の先生の何人かが平泉に会議や何かがありましてお集まりになった。その日程を聞いていて、ちょうど会食される場所の場所に私が乗り込んでいきまして、新聞によると浄土思想というのが盛られたと。ところで、先生方、浄土思想、もしわかっているなら教えてください、私の前で言ってくださいと言ったら、だれも答えませんでした。答えられなかった。ある先生から、「だからこれからみんなでそのコンセプトを、概念をきちんと共通認識するために話し合っていかなければいけないと思っておりまして」と、こういうことでした。その後何度かお電話をその先生にして、どうになりましたと聞いても、「いや、文化庁が一向に会を開いてくれないので尋ねたところ、もう推薦書を出したのだから委員会を開く必要ないということで、会議を開いてもらえない」というのですね。そのままです。だから、後でイコモスから質問来ても同じようなことを、あちこちから引いてきた辞書的な説明を並べているだけであります。これでは話にならないですね。

簡単にそのところを私は皆さんに御理解いただくために申し上げますが、「浄土」という言葉は日本語ではないということを知らない。中国語なのです。それが鎌倉時代になってから法然上人の説かれる専修念仏、浄土宗というようなことになってから、浄土、お浄土はというようなことになっていく。日本に輸入した言葉が日本的な意味合いをさらに深めていくのでありまして、12世紀、平泉の時代には、浄土という言葉が、西方弥陀の仏土という一義的な意味だけでなく、生の中国語経典の中の法語として、そのまま書写され、読まれていたわけでございます。

これは、5世紀に鳩摩羅什という人が、この人はお父さんがインドの人で、お母さんが中央アジアの方ですが、この翻訳の天才がつくった言葉なのです。サンスクリット語の原語には、いわゆる阿弥陀経とか観無量寿経と言われるものの原語には、浄土という意味合いはありません。だから、スリランカのジャガスさんのような、南方仏教を受けた人々には浄土という概念がないわけです。それも知らずに、仏教国の方が視察されることになったから大いに力強い、なんて新聞はもう報じる。新聞の前に担当者がそう、安堵した、ひとつ力強い

ものを感じたみたいなのを記者の皆さんの前で話しているのです。それが報じられた。冗談ではない、南方仏教に「浄土」という語がないということを知らないのだな。そこから問題はさらに具体的になります。

皆さん一般の方々が思われるとおり、来世を阿弥陀様の世界にイメージして、そこに浄土があるというのは、日本人がほとんどまず第一義的に感ずるところです。思いをそこに運ばれるわけでございます。阿弥陀経には、「これより西方、十万億の仏土を過ぎて世界あり。名づけて極楽という」とはありますが、浄土とは書いていない。阿弥陀経の中、浄土という言葉はないのです。原文読んでいないから、皆そう思うのです。では、十万億というのは何かというと、果てしなく向こう、無限の彼方なのです。

観無量寿経というのは、これは秀衡公が、第3代の秀衡が一番信のよりどころにし、平泉にあの無量光院をつくった。その中に、この観無量寿経の意味を壁に絵でかいているのです。こうやってイメージしてください、こういう山の向こうにこういうすがすがしい水、風の吹くところにこういうイメージをしてください、光はこのように一というようにかいてある。それをずっと無量光院の中の扉に、ちょうど宇治の平等院鳳凰堂のような形でなされたわけです。ところが、秀衡はそれだけではない。扉をあけると、びっくりすることがかいてあった。それは、ウサギだかシカだかわかりませんが、こうやって生き物を殺しているところ、殺生しているところをかかせているのです。それは吾妻鏡の中にも、ちゃんと引用されて書いてある。頼朝の陣所に出した、平泉の寺僧が持って行って既得権を認めてくださいと、こういうふうな物件があります、これにはこのような意味があります、こう書いてありますというのを全部出した、その中にも無量光院の扉には殺生の図がかいてあると書いてあるのです。

観無量寿経には、まずみずからが意識するとしないとにかかわらず、生き物を殺して食べて、踏んづけているわけですから、そこから懺悔しなければというところから始まるわけです。それをちゃんと秀衡はやっている。

この観無量寿経には、ある国の王様が仏教を信奉されていた。その息子が悪い友達にそそのかされて、おやじのやっていることはおかしい、もしかしたら自分に後継が来ないのではないか、いろんな疑心暗鬼になって父王を幽閉するのですね、閉じこめてしまう。それをお母さんが悲しんで、隠れて食べ物や何かをたもとに隠して届けていた。それが発覚して、おまえもか母親も幽閉されてしまう、こういう物語設定のお経なのです。そのお母さんが小さく開いた窓から、お釈迦様に声をかける。なぜああいうふうな子供になったのか、息子になってしまったのでしょうか。私はもう命は惜しくない、早くあなたの浄土に往生したいのだ。どこに行けば、どうなればということを必死に尋ね求めている（求道）、そういう内容のお経なのです。

そのときに釈迦は何と答えたか。前には十万億土の向こうにあるのが西方、阿弥陀の極楽だと教えているのに、今度は、そこに気がついたら、もうあなたのすぐそばが浄土です、こう答えている。そこを去ること、ここを去ること遠からず、つまり心の持ちようなのですよ。

十萬億土も、気がついたらそこが浄土だという。浄土の土、みんな国土交通省の土だと思っている。どこかにそういう国があると思う。そのように絵にかいたものはありますが、それだけではないということです。土という言葉は、他にこれにも意味が2通りあるのです。ここに今申し上げましたが、この無量光院の示されているのは「往く浄土」、そしてそこは仏・菩薩の住む安樂国土。スカーバティーと言うのですね、来世浄土をスカーバティー。スカーというのは安樂、バティーというのは何々がある。だから、安樂の世界というのを直訳したのが来世浄土という意味です。そして、我々の住む矛盾した人間世界を穢土と言う。穢土として汚れた世界から無苦の世界、それを浄土としてあこがれる、思いをそこに運ぶということ、そこに祈りの世界を展開する、それが「往く浄土」の教えなのです。

ところが、最初に申し上げましたように、浄土に、もう一つ別な意味があるのだと。それが「浄仏国土」、これは維摩経に、皆さんのところにお配りしたカラーの写真が文殊菩薩と維摩居士なのです。厳しい顔していますね。維摩居士ですから、俗人、一般社会の人。経済界の人です、維摩というのは。ただ、経済界にいるから汚れているかということ、無垢という、汚れの垢のない人、それが維摩という意味でございます。この維摩経というのは、普通のお経と違ひまして、非常に単刀直入。新聞で知りましたが、こちらの議会でもこれから一問一答でなさるそうでございますね。この維摩経が一問一答なのです。抽象的な回答は許さない、聞いたことに対してきちんと答えなさいと、こう言われるのです。

この中で浄仏国土というのは、仏国土を清めるという意味です。仏国土を清めるということは、衆生、人間というのを「国土は」と言うのです。我々生きている者、人間のための仏教、人間のための宗教なのです。宗教のために戦争をするというのは、全く愚かなことです。衆生という国土こそ、菩薩の国土である。仏国土は、衆生を抜きにして空中に抽象的につくられるはずのものではない、こういうふうによりとりの中で答えるのです。

そして、「直心」、素直な心、いろいろあれこれ推しはかって、あれでないか、疑心暗鬼なんかにならない、ストレートに人の言葉を信用できる、人間を受け入れられる、違った考えの聞ける人、これを直心と。直心は、これ菩薩の浄土なり。人なのです、浄土というのは。

「深心」、人の言葉以上にその底にあるもの、思いを酌んで人の話を聞く、それを深心と言います。これ菩薩の浄土なり。慈悲、慈しむ、困っている人に何かを施すだけではなくて、慈悲の悲、これはその痛みをともにするという事です。これが偉いところなのです。

中尊寺に皆さんおいでになったときに讚衡蔵で、千手観音がこういうふうの手を合わせているのが真手、真実の手で、あとの手はうその手かということ、うそではない。効能、働き、いわゆる慈悲を具体的にあらわして、いろんなものを持っていたのです。これで戦争、ここで家族のいざごぎ、あなたの生涯地獄だと思っているその心、みんな救おうではないか、これが手なのです。いっぱいありました。その下に何も持っていない手が、気がつかれましたでしょうか、持っていない手が1本あるのです。それが慈悲の悲なのです。これ 50%、あとの全部手を合わせて 50%、慈悲の慈なのです。この持っていない手、これが大事なのです。持っていては人の痛みわからない。熱いところ、痛いところに手を当てて一緒に悲しむ、

それが観音の慈悲なのです。何かしてやるという意識のないところ、それが悲なのです。そういうところが、そこが仏国土である。仏国土が清らかになる、それが浄土、生きている人とお互いを認め合う。動物も自然も山川も、そこにお互いさま、助け合う、それが浄土なのです。

この浄土の原語は、さっきのスカーバティー、安楽のあるところではないのです。もう一つの、語源がクシェートラという国土、大地という意味と、もう一つそれには精神、心の宿る体という意味があるのです。それも1字に合わせると土、国土の土になってしまうのです。だから、浄土という言葉が簡単に英語に訳といたって、まず先生方みんながその概念をどのようにまとめ、どう発信するかを協議してくれなければだめですよと言ったのに、推薦書出してしまったから、呼ばれないからと、その後、会議一回もやらなかったのです。だから、こういう結果になるのは当たり前であります。

なお、その次に「常寂光土」というのは、これは法華経で説かれるので、困っている、おれはもうだめだと思っているその心にだって、そのまま浄土というのは認められるのだよという、もう一つ深い、これは京都で言えば大原の寂光院がこの寂光浄土の言葉をとって寂光院と言っているのです。例えば一関第二高等学校の照井翠先生という方が俳句なさるのですね。中央俳壇でもこのごろ認められてきた方ですが、あの方が「雪浄土」、しんしんと降る雪、ふっとその雪がやんだときに日が差して、スズメが遊んだ。「雪浄土雀も仏なりしかな」、これなのです。こういうふうにして、日本語で日本人同士であると、何となくイメージでもって、そこに俳句であり、あるいは歌であって、あるいは色合い、言葉の肌合い、そういうものでわかり合えるところがありますが、英語に訳すのにピュアランドと訳すしかないと言うけれども、「浄土なり仏国土をピュアランドと訳すのはいいです。しかし、イコモスに限らず、世界の人で、ピュアランドと言われて浄土を思う人は一人もおりません」と。これはユネスコの人から言われた。そういえば、かつて鈴木大拙、外国で禅を広めたあの方だって、ピュアランド一つでは、どこかにそういう島があるというふうに、名詞としてとられるから、だめなのだということを書いていました。

どうしたらいいかということは、仏教徒の人たちに、大学に一。今自分たちであれがだめだ、これだめだというのは言えるけれども、ではおまえたちどうするのだと言われたら、答えなさい、答えましょう。二、三日中にその答案が私のところへ届くはずです。私の先輩、後輩を入れて、もう官庁の人を頼んでいてはだめだから、佛教の、大正大学の各宗派の人たちが集まって、今の日本の20代、30代の人にもわかる日本語にまずつくってください。そして、それをあなた方はこれでは誤解の余地ないだろうと思う最善の英語をつくって提示する、そのぐらいの責任はあるねということで、今やってもらっております。そして、それを全国に発信して、それも文化庁でも参考にさせていただきたい、そのようお願いしてあります。もうこれから、また県の担当課へお任せくださいなど、信用できないから、このまま勝手に進まないように。大体、浄土と言いだしたのはだれなのですかと、その委員の人に直接会って聞きましたら、「いや、仏教のといっても仏教もいろいろな意味合いがあるから、

浄土と言ったほうがインパクトがあると思って言ったら、通ってしまった」というのですね。そういうのは無責任というのですよ。

江戸時代に、京都の相国寺の僧に藤原惺窩という人がいまして、この人が「をろかにも西とばかりはたのむかな、穢土に浄土はありける物を」と詠んでいるのです。まさに別世界に、どこかにあると空想するのではなくて、今我々の中でお互いを認め、違った価値観をどううまく認めて、そして生きて生かされていくか、共に生きていくか。共生という言葉がいつときはやりましたけれども、あれは浄土の教えの中から出てきた言葉です。トモイキと読むのです。共生というようなことは、ともに生かされて生きているのでしょうかという、その自覚がお互いを助け合う根源、根本であります。

また、上田三四二という方がいて、この方は歌人であり、そして評論家であり、小説家であり、あらゆるところであらゆる賞をもらった人ですけれども、この人が「地球浄土」というものがかつて書いたことがあります。それはこんなふうでした。平泉を訪れた西行ですね。概念だけで話していないで、具体的な、時代の中で人を選んで、その人が何を見ていたかということをつかむことが肝要です。西行に厭離穢土、この現世はだめだ、もうあの世に行こうなんていう死への傾斜はなかった。出家はしていますけれども、歌聖と言われる西行、2度平泉を訪れている西行、厭離穢土といった消極的に現世に対処する、あの世に夢見るような死への傾斜はなかった。俗世は捨てても、死に急ぐ心は持たなかった。月の歌をいっぱい詠んでいますね。しかし、その月は途方もない高みに照って、その光は現世を否定するのではなく、光はまさしく地上を照らす月だった。花は、桜ですね。花は頭上幾ばくもない中空にかかって現世を荘厳している。花は地上の花であり、現世の花である。西行の求めた、欣求した浄土は、月によって彼岸のたよりを得、花によって此岸自体が照る現世浄土であった、というようなことを「地球浄土」という文章の中で書いていたのを思い出されるわけであります。

では、そういうことをまとめて言うとうどうなるかといいますと、資料の2ページ目の一番上のところです。浄土というのは、究極的にはあるがままの現象世界をそのまま仏の悟りの世界と見て、AかBかとか、生か死かといった相体的な名辞や区別を超えた、現実のそのままを肯定して一、ここですよ、我々凡夫にも一般庶民にも内在する可能性、仏性を認める。命の尊さをひとしく認める。さらに、日本的にそれを展開したのが我々がイメージしている浄土というものであります。「死んでから行くところ」と、実は概要説明のパンフレットの一番最初に、そう書いてあるのです。だから、その委員の先生方が今どこの講演へ行っ、死んでから行くところだけが浄土ではありません、なんて講演なさっているのはおかしい。まず、自分たちが認めた、これ間違いでした、適切ではありませんでしたと訂正しなさいよ。それ言わずに、私はそうは思っていなかった、浄土というのは英語にするとき難しい言葉になるのではないかと思っていましたとおっしゃっている。なぜそういう言葉を選んだ、なぜ途中で聞こうとしなかった。芭蕉は、「松のことは松に習え、竹のことは竹に習え」と言っているでしょう。今からでも遅くないから聞いてくださいよ。ようやくこの12月になってか

ら、仏教学の専門の人を講師に招いて文化庁で勉強会を始めました。私は、既に去年の今ごろの時点で、ここから困難な道りであるならば、ドナルド・キーンさんと相談しなさいということを何度も言った。「いや、そういうわけにはいきませんよ」と。なぜ、今度は文化勲章もらったからいいでしょう、何も外国の人に教を請うたと言われなくていいでしょう、日本が認めた人なのだから。「いや、ああいう先生にご指導を受けると、言われたとおりしなければならなくなるから困る」と言うのですね。外国の人に日本の文化、日本の仏教、それを仏教という形の中だけではなくて、生活、習俗、文学、そういうものに、このように流れて、このように土台になっているのだということを一番お話しできるのはキーンさんだと思うのです。

そして、去年カナダがイコモスの議長国で、その関係者に日本がもう一度説得しようとして接触したときに何とおっしゃったか。「日本、またですか」と言ったのです。日本の言うことはもう聞きません。議長国がもう去年の4月の時点でそう言っているのです。なぜか。前の石見銀山で大分無理言ったようですね。そして、日本ですよと私に言うのです。落ちるわけがないではないですかと。これが傲慢なのです。その人もいまだに、あのときの私どもの認識が間違っていましたと謝らないのです。これですね、いけないのは。このあたりをきちんと反省していただかなければ、何回やってもだめですし、ユネスコ関係の方から、「今度がラストチャンスです」と私どものほうに流れてきました。その文章も、今度の中尊寺の寺報に活字にして載せます。

この岩手県の中で、平泉の役場の中で、文化庁の中で、どんな話があったか、大分フランスに流れていました。「落ちるはずがないでしょう」、「もうやることはやった」、こんな会話しか向こうに届いていないのですね。そして、急に近藤大使が悪戦苦闘していた。あの人も被害者みたいなものですが、「藤原三代、何も知りませんでした。仏教も知りませんでした。ただ、限られた期間でやれるだけのことやりました」と、一生懸命あの方はやってくれた。激励しましたよ、私も。3月24日、中尊寺供養の願文を清衡公が読んだとき、その日それから八百何年後の3月24日、近藤さん、あんな誕生日でしょう、頑張ってくださいなんて、それで資料提供して、文化庁経由しないでフランスに直接写真を送ってやりたりして応援して、これ使いなさいよなんて応援はしましたけれども、いかんせん全体の流れとして、もう議長国が同じことを石見銀山で懲りていますからと言われたのならしょうがないと思っております。ことし多くの方から私年賀状いただきました。文化庁の上のほうの人から、「文化庁の認識が甘かったのです」と1行小さな字で書いてありました。本音だと思います。

今まで申し上げたようなことは、これは当時の特殊な人たちだけが認識していた浄土なのか、そうではないのですね。資料の2ページの流行歌（はやりうた）に聞いてみてください。これは、「梁塵秘抄」という後白河法皇が子供たちの、あるいは田舎の人たちの素朴な生活の中で歌っている歌を何百と集めるのですね。この方は大変な、そういう歌謡に御執心な法皇でございました。「梁塵秘抄」の中に19番目の歌に、「ほとけはさまさまにませど

も、まことは一仏なりとかや、薬師も弥陀も釈迦・弥勒も、さながら大日とこそきけ」、さながらは、そっくりそのままですね。子供たち、これ歌っている。これが真実なのです。ですから、西方極楽浄土阿弥陀如来とさっき言いましたけれども、あの源信の「往生要集」を推薦委員会は引用しながら、ここを読んだのかと申し上げたい。その第1章の中で、こういうやりとりあるのです。その時代の人が、「なぜ西なの、東ではだめなの。阿弥陀さん、なぜ西なの、そこにどんな意味があるの」と、その時代の人もそう質問しているのです。それに対して、恵心僧都源信はこう答えた。「例えば、それをあっちにもある、こっちにもある、あなたの気持ちの中、あなたの心の中と言ったら、どうなる。みんな、ああ、どうでもいいのだ、眠たければ寝ていていいのだ、腹減ったら魚釣って食べばいいのだ、西でも東でもどこでもいいのだとなったら、我々凡夫、一般庶民はなかなかまとまった一つの祈りにはならないではないか、だから西と言っているだけだ」と、こう書いているのです。それが日本人の美の感覚、詩人的な感覚と溶け合って、夕日の沈む、夕日の大きく輝く西の方、それも山を越えて、阿弥陀さんのように大きく日本海の西にずっと夕日が沈む、それと情景を合わせてイメージして、絵画になり、物語になっていくのですね。ですから、本来は西であれ東であれ、それは方位方角の西ではない、宗教的なオール方角の西なのだということです。だから、お釈迦さんの教えを説いている一つの形が阿弥陀さんですから、それを将来像として弥勒さんも、では今この痛いのもうしてしてくれるのという切実、具体的な願いにこたえるためにお薬師さんが、というふうに説くわけですが、別ではない。密教で説く大日如来、一字金輪仏も皆同じなのです。本質（仏）は同じなのです。

「ほとけは常にいませども、うつつならぬぞあはれなる」、あわれというのは、哀（かな）しい意味のあわれではなく、しみじみそう思いますの意。「人のおとせぬ」、まだ人が眠っている、「あかつきに、ほのかに夢にみえたまふ」、現実と夢とのその間に我々は見ることが、イメージしたり思いを運ぶことができるのですね。

「平等大慧の地の上に」、仏教は平等だという大きな智慧、知識ではなくて大きな智慧だという、その教えの大地の上に、だったら出家して苦行した人だけが、修行した人だけが救われるのですか、そんなものではない。きゃっきゃ遊んでいるあの朗らかな、「童子の戯れ遊びをも、やうやくほとけの種として」、ようやくとは、次第に、仏の種、自分の中にある仏性を開発していくのだ。「菩提大樹ぞ生いにける」、大きな菩提樹になっていくのでしょうか。あどけない子供が、例えばそこで砂でもってこれも仏様だをつくったら、これは本当の仏さんなのだよ。漆塗って立派にして、何万円だか何億円だかする運慶作だけが仏像ではないのだ。子供が、波が今に来てずっと流してしまうであろうその砂でつくった砂浜の像も仏さんなのだよ。そして、そのつくっている子供の心に仏の種が宿っている。そういう自然の中で、そういう幼児の、あるいは青春の、あるいは若いエネルギッシュな時間を過ごすことがどんなに幸せであり、将来にそれが大きな大樹になっていくか、というふうに認めているわけです。

「浄土はあまたあんなれど」、浄土はいっぱいあると、そう書いてあるのです。昔の人は

みんなこれを常識として知っていたわけです。「下品下にてもありぬべし」、皆平等だといひながら、阿弥陀様は9体ある。上中下とある。疑い深い人もいるのです。おれはそんなことやっつけられない、もうけるほうが大事だと、縁遠い人もいるから、上中下。すぐ悟る人ばかりではないのも事実です。下の下、もう償わなければいけない罪を犯してしまった人、この人がいるわけです。では、その人はどうなるの、それを、下の下こそが救われなければならない。「九品なんなれば、下品下にてもありぬべし」です。阿弥陀様はちゃんとそこにも手を差し伸べていますから、往生への道は閉ざされていません。それが仏教であり、宗教なのです。

205番のところは、どこかで聞いたことがあるでしょう。「?利の都は」、天国のことです。「?利の都は歓喜のみなをぞ唱ふなる」、妙なる声がする、音がするのですね。中尊寺経、紺紙金銀字経をずっと開きますと、見返しの絵が全部かいてある。その上のほうにリボンのようなものが飛んでいるのです。あのリボン、飛行楽器と言いまして、今この場面には音楽が流れていますというサインなのです。浄土、天国すべて音楽、音に満ちているのです。「?利の都は歓喜のみなをぞ唱ふなる、五台山には文殊こそ、六時に華をば散ずなれ」、1月20日に、毛越寺で二十日夜祭、蘇民祭ありました。蘇民祭というものは後からくっつけたものですが、毛越寺の常行堂に行くと、明かりの中で、周り暗闇ですね。そこで延年の舞が深夜ずっと続くのです。村の人たちは、寒くないようにして着込んで、こうやって見ていたはず。今は、民俗学の調査やカメラマンとか取材陣取り合戦みたいなのですけれども、そういう中で唱えられてきたせりふがこれです。ですから、京都の方だけではやっていた歌ではない。平泉でも、これがはやり歌の中にあつた。あの若女、老女、そして子供たちが鼈(ササラ)持って、楽器持って、そして踊ったりしている中のせりふの中にこういうものが入っている。だけではなくて、私どもは正月8日の日まで、国家、世界の平和を祈るために8日間修行いたします。お祈りします。それが修正会。2月に東大寺の二月会ありますね。修正会というのは、元日の零時から御祈祷に入って、我々身心清めてお勤めする。この中の言葉に「十方の浄土は悉く」とある。十方の浄土ですよ。四方八方、上下入れて十方、すべてと、全宇宙、全世界浄土。我々は日常的にこういうものを口にして、読んで、耳にしているのです。

「悉く鷲峰」、鷲の頭の峰。讚衡蔵で、お経の文字でかいた十界宝塔曼陀羅があつたはずです。そして、その内容を両わきに絵でもって示されていた。その一番上は全部鷲の頭のような山がかいてあつた。そこはどこかというと、そこが現世の釈迦が我々のために現実世界、この世のために出現して法を説いたインドビハール州の中央の山、それを靈鷲山という。そこで説かれたのが法華経をはじめ八万四千の經典である。八万四千というのは、絶対的に多くの、という意味です。

「鷲峰の天と一つなれば」、時代を超えて、「妙法の蓮普く満ち満ちて」、妙法蓮華経ということです。妙法蓮華経というのは、日蓮宗のためだけにあるのではない。西方浄土のことも法華経の中に説いているのです。今、西方世界で阿弥陀さんが法を説いているよ、と。法

華経の中でも言っているのです。これが釈尊の説かれた仏教の最終的なまとめ上げたのが法華経なのです。あのお経もこのお経もと読んでもらうのが一番いいのですが、なかなか全部読んでもというので、もうこれしかないというので、阿弥陀さんだけに向かう。それも南無阿弥陀仏、これだけで勘弁してもらおう。南無妙法蓮華経、これだけで勘弁してもらおう。信ずることだみたいになって、日本的な展開なのですね。

確かに南無阿弥陀仏というのは、南無というのは一心に帰依します。阿弥陀如来に一心に帰依します。中国へ行きますと、何十年か前は毛沢東語録いっぱいいろんなところに聯（れん）として書いてありました。あのペンキの下に南無阿弥陀仏と書いてあったのですよ。今は、お寺の付近の毛沢東語録が消えまして、そしてまた下の南無阿弥陀仏が見えております。

ここに言いました五台山は、中国山西省、北京から汽車で一晩、太原というところへ行きまして、そこから行く。ちょうど平泉と緯度が同じなところですよ。峰が五つあるのですね。最初に訪問したときは、ふもとまで行ったのですが、登峰を拒否され帰されました。上のほうに軍事的な、というのはそこから見ると当時のソ連邦の方が全部見えますので、軍事的な秘密などあったのでしょうか。それもそういうことを口にはいけなと言われて一。2度目に行ったときには、乗せられたバスの車体に、「横浜バス」なんて書いてある。いうの、その上にペンキ塗ってあるのですね。タイヤもつるつるですから、砂礫の坂道を右に左に上っていくと、もうパンクして登れません。そこからもう歩いて直登しまして、女性の方は酸素ボンベや何か持って登ります。富士山より高いのですね。途中、破壊された仏像が土どめになっているのです。畑の土どめで仏像の手だの足だのなのです。おお、ひどいななんて言いながら。

でも、もうみんなと仲よくして、いろんなところを見せてもらいました。最初、五台山登拝が許可されなかったときには、中国側が軍隊のジープ10台出してくれて、天龍山石窟に行ったんですが、大分首から上が壊されているのですね。これはもう日本の軍国主義が壊してきた、その修理やっているのです。そういうところを見て、我々みな言葉を失いました。首ないのですよ、何十という仏像。私も聞かなければいいの、この首はどこにあるのですかと言ったら、今まで、友好的だった人たちが、急に私をどなるのですね。ふざけるのではない、東京根津の美術館にあると。わからないのか、大阪の大学にあるではないか。あの博物館のあれだよ、こう言われたときには、もういても立ってもいられなかった。帰国後、せめてもの罪滅ぼしにと石像修理の情報を、こちらの文化財の委員会の調査や何かのものを、データがないものですから、送りました。本人についたのは10カ月後でした。みんな検閲されていたのですね、その間。

一番私がそこで感じたのは、その人々に、「あなた方日本人は楽な負け方をしました。我々中国はつらい勝ち方をさせられました」と、この言葉は私にとってもつらい思いを今でも引きずっているわけです。

そして、そこにジャガスさんの指摘、先ほど申しましたように本物で話しなければいけない。「仏教」を言うならば、「浄土」を言うならば、それを書く人、英訳する人も、イコモ

スの会場に行って説明する人もお経を読んでください。今幾らでも現代文になってルビ振っています。それぐらい読んでください。2回読めば、こんなこと書いてあったなぐらいのことはわかります。そういうふうに思います。

もう一つ、これまでの進め方でいかに間違いが多いかという、挙げておきます。関係の方もいらっしゃるかと思うので、お気の毒でございますが、一関の問題ですね。それで、骨寺村荘園遺跡を入れる。そうなのです、要はそこは大切なところなのです。私もそう思うのです。けれども、イコモスは、あそこがだめだとか、白鳥館遺跡がだめだと言ったのではない。説明のつくところを挙げて書き直してください、そして説明をしてください、具体的に説明してください、こう言っているのだから、説明つかなければだめなのです。文化庁・県こちらで出したのは、「骨寺村荘園の水田地帯の西に位置する山王窟は、天台信仰に基づき神聖視された岩窟であるとともに、極楽浄土世界の方位を象徴して造営されたものであり、荘園の空間構造を認知する際に浄土思想が色濃く反映したことを示している」、何でもっとすっきり言えないのかなと思うのです。

そして、具体的には「極楽浄土世界の存在する西という方位が荘園の空間認知に明確に反映」、なんかしていません。うそですよ、これ。だったら聞きます。山王窟、山王社、比叡山王権現、比叡神社のことです。比叡山のどこにありますか、根本中堂の真東にあるのですよ。あそこは東塔、西塔、横川と、三方、谷々に分かれ、さらに東塔の真東を東谷という、その中央の根本中堂から真っすぐ東の新たな峰に建っているのが比叡山王権現二十一社、百八社。東ですよ、どう答えるのでしょうか。その儀軌聖教の中に西がどうのなんていうことは何も書いていません。

山王とは、山王三聖とここに書いておきましたが、大比叡、小比叡、聖真子というふうにそれぞれの日本古来の神と仏教を合わせる、外来の仏教に日本古来の八百万の神々を皆合体する、こういうことが日本の得意なところなのです。そして、これが三輪明神だとか、奈良県の三輪、あるいは大山咋神、これは本地仏は薬師。東方瑠璃光世界、東の世界の方。聖真子というのは宇佐八幡宮なのです。これが八幡神で本地仏が阿弥陀如来。だから、山王だから西なんていうことはない。どうしてこういうことが委員会で問題にならなかったのか。

そこへもってきて、関係者はもはや言葉のデフレと言う以外にないですね。カウント・ダウンだとか、ラスト・ピースだとか、戦略、逆転・・・、何でしょうかね。全部やり直してもらわなければいけない。それ以上言いませんけれども、そういうことであります。

そこで、ではどうするのか、中尊寺はどうなのだ。資料3ページ目の中尊寺供養願文を読む、これを基本に置いて解釈されたいでしょう。「経蔵に金銀泥一切経、金書銀字一行を挟んで光を交わし、紺紙玉軸、衆宝を合して巻を成す」、世界じゅうで紺紙金銀字一切経というのは中尊寺経しかないのです。日本国が国家の力で天皇が施主となって、あるいは天皇の前天皇、院の方が主催者となってなされた、国家の財力でもってやった一切経はありますが、紺紙に金銀交書の経は一切ありません。一部、法華経8巻が比叡山にあるだけです。

中国からの輸入品とする説もあります。

なぜ、清衡にそういう発想があったか。慈覚大師円仁という人が9世紀に、先ほど申しました中国山西省五台山まで国内逃避行して9年間そこで仏教を習得し、必要な経典を持って帰ってくるのです。ただ経典を持ってきただけではなくて、いろんな情報も持ってくる。だから、トルコの民謡、民話なんかも、平安時代にそうやって入ってきたわけです。そのような9年間その山での修行・見聞の日記が残っている。それが「入唐求法巡礼行記」です。余り今まで学問上、歴史学上、仏教史の中で大きくは取り上げられませんでした。これを世界じゅうに取り上げたのがライシャワー博士であります。「世界史上における円仁」という大論文をわかりやすい文章で書いてくださった。その「巡礼行託」中に、経蔵閣、2階造りですから楼閣の閣です。大蔵経というのは一切経、すべて紺碧紙、金銀光相交わりて、こう書いているのですね。そして、清衡が、平泉に中尊寺を建てるそのときに、堂塔を建てる原材料をそろえるのではなくて、まず根本になる経の書写、写経から始めた。それを8年間かかってやっている。10巻やるのに2カ月かかっています。それもただ書けばいいというものではない。大事な文字ですから、誤字、脱字ないように、しかも異本校定、底本の違うものにはこここのところはこの字になっています。経巻の上部に「イ」と書いて、異本にはこうあります、そこまで厳密を期している。

そこで大事なのが「冤霊」という言葉、先ほど言いました。鐘樓の記述です。「一音の及ぶところ千界を限らず。抜苦与楽、普く皆平等なり」、官軍夷虜、官軍賊軍、「その別なく、人間が死ぬということは古来幾多なり」、だれでも命あるものは、生きとし生けるもの死は免れない、平等だ。人間だけではなくて、「毛羽鱗介、獣や鳥や魚介の屠を受くる」、屠殺されて食べられるものも、殺されるもの、「過去現在無量なり。精魂は」、それらの魂は、「皆他方の界」、あの世、「に去って、朽ちた骨だけが猶此土」、この世、「の塵となる。鐘声の地を動かすごとに」、この鐘をゴーンとついで、東北の大地に響き渡るごとに、「冤霊をして浄刹に導かしめん」。敵味方の隔てなくですよ、これが靖国神社と違うところなのです。英霊ではない冤霊です。だれも喜んで死んだ人なんかいやしない。前九年・後三年合戦で命を失った人々は戦死、死なせられたわけですから、その思いを酌んで、網かけられて、ぷるぷる震えている、まさに「冤」なのです。兵隊にとられられたら、こうなってしまう。冤霊をして浄刹に導かしめん。「徼外の蛮陬たりといえども」、果てしない地方の不便な、都から遠く隔たったところといえども、「界内の仏土と謂いつべし」。「界内」という言葉を、外側、内側の意味だと思って解釈したものもあるようですが、界内というのは仏教語です。これは、我々凡夫も一緒ということです。学者だけが、一部のエリートだけが比叡山の高僧だけが救われるのでは仏教ではないのです。子供が、茶髪の若い者も、別な言葉の人も同じように救われなければ仏教ではない。みちのく丸ごと仏国土にしようとした。

だから、平泉の仏教を言うならば、奈良、京都とどこが違うかと言ったら、厭離するところがない。ここはだめだ、捨てるところはない。丸ごと浄土、だから清衡は「一万の村々」、すべての村ということです。東北すべての村に寺をつくった。つくっただけではなくて、維

持費にあてがうために灯油田、灯油の経費を賄う田んぼもそれにつけてやった。これも記録に残っている。そして、あの栃木県と福島県の県境、みちのくに入るこの白河の関から津軽の外ヶ浜までです。あれは内外の外と書いてソットノハマ、卒塔婆の浜なのです。そこまで通ずる道、これを「奥の大道」と言ったのです。ここが大事なのです。奥の細道ではない、奥の大道と言った。

今研究者、発掘の先生方は奥の大道、これまでは文章に書いてあるだけで実態はわからなかったけれども、出てきた。どこに。郡山の新幹線の降りてすぐのところ、荒井猫田遺跡です。それから仙台太白区の大野田、王の壇遺跡、だんだん出てきている。たかだか4メートルの道幅、両側1メートルの側溝があります。なぜ大道と言ったのか。これを、ある先生は主要道路、幹線道路だから、中央にまで通ずる道路だから大道と言ったのだと解説して、みんな納得しましたね。では、聞きますけれども、東海大道と言いますか。東山大道と言うのですかね、おかしいではないですか。因島、あの小さな島にも大道あるのですよ。

大道の大というのは仏でございます。仏の道ということです。そこに1町ごとに、106メートル置きに阿弥陀さんの塔婆を立てたのです。それを金色にかいた、吾妻鏡にもそれが書いてある。その道を、鎌倉から攻めてきた頼朝の軍はそこを通っていますから、その何本かは見ているでしょう。そこへ出す平泉白書「寺塔注文」ですから、うそを書けるはずがない。嘘の入る余地のない状況下で提出された文章ですから、信憑性が高い。

そして、時間ですので、まとめさせてもらいますが、ここに、前の中尊寺貫首、千田孝信師があらゆる機会に申されました「成仏するということは、来世に仏になることではない」、と言い切っている文を読みましょう。「おのれの心の中から憎悪と怨念を消し尽くし相手を宥すこと、和解することが成仏であり、安らぎの浄土にいたることなのです」。このほかないのです。仏教はそういう教えです。

浄土は、人生の中で思い念ずるものです。自他を生かし合って生きることです。そんなことできるわけがないと捨ててしまわないでください。かつてドイツの、あるいはヨーロッパの知識、知恵と言われたワイツゼッカーさんは、日本に来て講演されたときに、「歴史に目を向けない人は、現代にも盲目である」ということを申されております。その学ぶべき文化、歴史が我々にはあるのです。それを世界の遺産として、きちんと誇りを持って、言葉の違った人々にも理解していただくように努める責任がある。彼らは具体的でなければいけないのです。抽象論ではだめなのです。それを、受験していながら、「考え方が我々と違う」なんていう反省の弁はないのです。合格するように答案は書くべきものです。そして、合格してからさらにその輪を広げ、深くしていく、そのことを大事にしなければいけないのであります。私は、昨年二十何回じゃ平泉町内外、県内でお話する機会をいただきました。延期がはっきりしてから、いよいよ多くなりました。会場に入り切れない人も、だめになってからいっぱい来るようになりました、聞いてくれるようになりました。県だけに任せてはだめなのだね、我々一緒に何したらいいの。一緒にまず草刈ろうか、草刈ります。そして、行ってみましょうと行ってみます。そのようにして自信を持って現地の人は平泉を受けと

めてくださるようになりました。その文化は、世界に、そして 21 世紀が今最も地球上の大きな問題、戦争、テロという問題に、それを遠い国の問題ではなく。

山本康夫の詩の中に「皮膚のない裸群」というのがあります。広島原爆、その中に 13 歳の子供がお父さんの胸に抱かれて最後に言った言葉。おなかすいていたのですね、「お浄土には羊羹あるの、戦争はないね」と言って息絶えてしまう。これを単なる詩として、文学として終わらせてはいけないわけであります。そんなふうに思います。

でも、我々にはとてもいい理解者がおります。中国の張忠志という中国大使館の一等書記官ですが、昨年春に転勤して、その方が本国に帰るときに平泉に忠告に来てくれたのです。

「浄土という言葉使っていますね、大丈夫ですか？」私と貫首、お茶室でその方の話を 1 時間ほど聞きました。「中国も、山西省の五台山を世界遺産候補として整理しているから、一緒になれるといいね、応援したい。しかし、私がイコモスの関係者だったら、こう尋ねるでしょう。浄土には、あの国道 4 号線のような看板がありますか。浄土には、あの山に夕日が沈むところ、遺跡の上に立っている鉄塔がありますか。あれを解決してから出すべきでは」と、こう言われました。平泉が好きだから、あした中国に帰るから、それだけ言いたいのだと、自費で、自分で来てくれて、それを言って帰られたのです。

しかも、「世界遺産」を文化庁から提案され、平成 13 年、最初の勉強会が平泉の毛越寺レストハウスの 2 階であったときに、奈良で、第 1 回登録で法隆寺の苦勞された青山茂奈良市教育委員長さんがゲストとして来てくれて、こう言ったのです。「いいですか、皆さん。経済効果とか観光へのメリット、これあからさまに言ってはいけない、それを期待するような顔してはだめですよ。そういう話は世界遺産に対する冒涇であり、慎まれない」。それが、経済効果への期待が、去年全部フランスに聞こえていました。岩手日報だけではなくて各紙の新聞、そしてピュアランドいわてから何から、知事はこう期待するまで皆流れていました。皆うんざりした顔をされたのは、そのためであります。登録になってからの結果に対して、慌てないようにしておく心づもり、手だては講じなければいけません。しかし、メリットとか、倍の観光客が来るから、これを大きな見出し、活字に出されたのでは、あのねと言われるのです。いいですか、このごろ世界遺産はもう十分多くなって、審査の基準が高くなって、という言い訳もよく聞きます。しかし、だったら、イタリアは今回 4 件だったのですよ。41 あるのですよ、イタリアには。さらに 4 件だったのですよ。1 件に失敗した日本が言うことではないのです。

そして、去年恐らく 100% になると信じた企画企業が動きました。動かした某報道社の方が、この人も平泉大好きな人でした、私に手紙をよこしました。「世界遺産となりますと、スポイド現象が起こって、人材も企画も吸い取られてしまう場合が多くあります。どうか十分に気を配られて」と。県で盛ったいろんな対応の予算、通過されました。が、結果は延期になりました。でも、予算使わなければいけないからと、集まらない人も集めてこなきゃならないからやった行事が幾つもあります。あんな金、無駄な金です。もっと使い方考えるべきです。何々劇場なんていうのから、企画丸ごといただいたからです。だから、だめだっ

た場合の対応を一つもしていなかった。皆こなしで、観自在王院に 300 人集まったから発表は 600 人にしろとかなんとか言っているわけですね。これが現実であります。

かつて、レイチェル・カーソンさんが 60 年前に言いました。「これからは経済の言葉だけではなくて、命の言葉で話さなくては」。まさに世界遺産を語る時に命の言葉で話す、その素材、環境は平泉ほどあるところはないと思っています。経済の言葉は、その後でしてください。

○佐々木一榮委員長 どうも大変ありがとうございました。

それでは、質疑を若干行いたいと思います。ただいまの御講演いただきました内容につきまして、質問ある方いらっしゃいますでしょうか。

○嵯峨耆朗委員 大変ありがとうございました。前々からお伺いしたかったことがあったのですけれども、中尊寺は天台宗でございましたね。四種三昧も含めていろんな、法華経もあれば、中心にあるわけですけれども、その中で浄土思想というとらえ方をしたことについて、どう思っているのかということに関心があった。

○佐々木邦世講師 今度のこれにですか。

○嵯峨耆朗委員 平泉を表現するのに浄土的景観のという浄土の言葉で表現、もっと多様なものだと思っていたので、どういうふうにしたか。

○佐々木邦世講師 使う人が浄土という言葉を知って使ってくれればいいなということと、今言ったような鎌倉時代以降の浄土宗、浄土真宗的な阿弥陀様一筋の白い道があります。あの世で阿弥陀さんにお会いできると信ずる南無阿弥陀仏、これがすべてと言った限定した、純粋など言いますが、そこに限定されたら平泉のものは説明できません。それよりも、削り取らない、そこも含めて金色堂、確かに西方阿弥陀を、極楽世界を。しかしあそこには阿弥陀さんがそう約束して信ずる、南無というのは一心に帰依するということですから、だったらほかの仏像要らないはずです。でも、迎えに来てくれる人、これは観音様、勢至菩薩、受け皿をこうやって持ってくるのは魂救うために来迎されるんですね。皆合唱していますけれども、このように弥陀三尊といいます。これで十分。なのに、そのわきにまた 3 体ずつお地蔵さんありますね。現実には、我々はそうはいかないのではないかと、もう罪犯した、地獄に落ちたと思っている人もいます。何でおれだけだ、あいつばかりと行って、うらやましがっている人間いるのではないかと、行って勲何等章もらってきたと威張っている人いるのではないかと、修羅道です。だました、だまされたと言っているのもいるのではないかと。しかし、こういう人こそ救われなければいけない。それは死んでからだけではなくて、生きている間にそういう環境で人生を充実して、生まれてきてよかったなと思って死ぬ、その先にこそ浄土はあるのだと。生死、生き死にを超えたものである。そのために地蔵さんを 6 体置くのは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天と、そこまで全部悩みのあるところですから、仏さんになるまで、全部が救われなければいけない。そのために地蔵さんがただひたすらこっち向いて、人殺したり、ウサギ殺したりしているのもそばによく見ると地蔵さん立っていらっしゃいます。そういう仏教ですから、もう純粋に言って、これしかない、浄土真宗の親鸞さん

の教えはすばらしいのですよ、哲学的に。私なんかもう随分学生に読んで聞かせるのはそっちなのですけれども、でも、そこに浄土というのは、もっと身近に、実生活に実感とするものに持ってこなければいけない。それが法衣を着ている者の責任なので、寺の中では、おまえさんたち、たばこなんか吸っている場合ではない、なんて怒ってばかりいるのでございます。周りの人に迷惑かけて、それで一隅照らすなんて、よくそんなこと言えるね、と言いますものですから、まあまあ、まあまあなんて押しえられていますけれども。平泉の場合には、浄土という言葉も、まだそんなに狭義に純化される前の、幅の広いものを含んだものとして受け止めていいと思います。そしてそれが遺構として残っている。無量光院であり、そしてお薬師さんも、大日如来、密教も一緒にある仏国土なのです。なぜか委員会で、仏国土と浄土イコールとするのはなじまないからと、しきりにおっしゃる先生いるそうですね。そんなことない。仏国土でいいのです。仏さんはみんなです。そう思っています。

○斉藤信委員 平泉の精神で、先ほど中尊寺の供養願文、私はこの精神というのは本当すばらしいと思うのですけれども、岩手県の宣伝になるとどうしても観光王国とか黄金の國とかきんきらで、何か経済の言葉になってしまうという、私そこにすごく違和感とずれを感じるのですけれども、先ほどそこはちょっと触れませんでしたので、平泉の精神とのかかわりで、ちょっとどういうふうにあるべきか。

○佐々木邦世講師 一口で言ったら何と言うか、ということがわからないから、訴えるのに手間取ったと、カナダまで行った人たちが言うわけですけれども、一口で言ったら「NO WAR」、非戦です。これが冤霊の意味です。反戦だとか英霊なんていうものではありません。これが通らぬはずがないのです。

○高橋元委員 今度の世界遺産の登録のいろんな史跡があるわけですが、その構成を見直そうというふうな話題もあるので、その辺に対しての御見解をお伺いしたい。

○佐々木邦世講師 実は、なぜ私に二十何カ所から来て講演しろというのは、みんなそれを聞いたかったわけですね。そのときに、平泉の人、奥州市の人、それから一関の人に言いました。あなた方が九つを選んだのではない、設定したのではないから、あそこがなければすんなりいったのに、なんていうことを言っはけませんと。思うのは勝手です。でも、それは住民感情として残ります。皆さんが負うべきことではありません。セットした文化庁と委員会が結論出すべきです。それは3月にすべきであります。私は、例えば骨寺村荘園遺跡や何か、今のように西の方にあるからなんて、あれではだめなのですよ。何とかこれもコア・ゾーンにしたいというのであれば、山王の信仰から位置づけ、そして中尊寺経蔵の世の一つしかないその中尊寺経の母体となった、礎となった、それが骨寺村荘園であり、そこには慈恵大師信仰という根源があったのだと、これを推す以外ないと思います。

我々は、できればそれは周辺の「中世の風景」として一緒になんて思う。私なんか、なぜ東稲山入れないの、なぜ北上川入れないのと言ったほうでございまして、かつて、藤島亥治郎先生も亡くなる前に、「何で遺跡だけが、掘った下だけが歴史ではないのだ。あの山を見て秀衡は平泉を考え、そして対応し、政治やったのではないか。その山がなぜだめなのだ。

だから、堤防もあの程度より高くしてはだめだ」と言ったのです。それで、国土交通省の人が見えたときに、平泉にとって北上川が動脈でありますから、川は道でありますから、道は人が入ってくる、船だけではない、情報も入ってきた、仏像も入ってきた。そういう川をなぜ文化的景観として世界遺産に含められないのですかと質問したら、川にはそれを管理する国の法律があつてなじまないからと。非常にあいまいなところがあります。川もある程度区切ったところで私は入れるのが、バッファゾーンとしてでも何でも入れるべきものだと思います。川なければ、山なければ、平泉ではないと思いますし、衣川も大事です。

○三浦陽子委員 大変ありがとうございました。私も昨年ユネスコで、花巻のほうで邦世先生のお話を伺いまして大変感銘を受けたのですけれども、やはり藤原文化、秀衡公が思ったこの思想と平泉文化の影響というのは岩手県だけではなくて日本に、そしてまた本当に世界に非常に影響が大きいというふうに思いますが、現実本当に岩手に住んでいるみんながなかなか理解できなかったのにもかわらず、この話がクローズアップされてしまって、県庁はもちろんのこと、私たちもなかなかついていけない部分というのがあったのですが、今後やはり今登録延期になったことが逆に私たちに非常にいろんな刺激を与えていただいたということで、佐々木邦世さんにとって、これをどのような力として今後岩手に、そして日本に生かしていったらいいかということをお伺いしたいと思います。

○佐々木邦世講師 昨年、名古屋で、それから大阪で、観光業界関係の皆さんに岩手にどうぞというようなお勧めするためのセットがありまして、私も行きました。岩手県の観光協会が主催みたいな形で、知事さんもいらして一生懸命岩手をPRされていまして。結構なことだと思います。私は、平泉のことは置いておいて、平泉よりどうぞ奥にいらっしやいと。平泉は、その行きか帰りに寄ってもらえばいいから、平泉にいらっしやいなんていうことを言う必要はない。それはもう花巻から、それから宮古から十和田のほうへ、どうぞあちらへいらしたらいいのではないですか。奥のほうは行けば行くほど、久慈のほうもいいですよんていうことを言っております。平泉をあげて平泉より奥を、以北、それを宣伝するならしたほうがいいと思います、お帰りに寄ってくださっても結構ですし。

ただ、イギリスで売っている 500 円ぐらいの日本観光のパンフレットにこう書いてあるのです。「あなた方が日本に行ったら、京都、奈良へ行くであろう。そこには仏教寺院、神社に行くことになる、それらは、ほとんどあなた方にとって異教の文化、遺産である。けれども、日本のこと、東洋のことを知ろうとし、歴史文化を知ろうとしたならば、日本のそういうところに受けとめるものがあるのだから、あなた方の宗教はそのままいい。日本のみんながやるように、同じように、静かにその仏像の前に対峙したらいいだろう」、こう書いてあるのです。これが正しい拝観の姿勢ですね。今、外国から、平泉を訪れる人は明らかに多くなりました。特徴は、皆黙ってしばらく立っています、雰囲気を自分でわかるまで。それから少し動いたり、それからしゃがんだりしています。昨年、日光に用があつて行くと、帰りなんか日光のJRの、あるいは東武の待合室なんかで、みんな五、六人ぐらいずつ外国の方が厚い本広げて「日本」を読んでいます。我々日本人の旅行者は行くところ、何日目は

何、パンフレットにしたのを見て、丸して、ここから何分、トイレはどこにあるなんていうのばかり見ているわけですね。外国のあの方々は日本、ジャパンをこうやって足組んで、40分後に来るバスを待って、その間にゆっくり読んでいるのですね。こういう旅の仕方いいですね。

それから、たまたまでしょうけれども、中国の天台山に仏教文化訪ねてアメリカから来た方です。ついでに日本に寄ります。ついでに比叡山に行きます。そのついでに日光に来ましたと。3日後に成田からいよいよ中国へ行きますと、こういう人もいるのですね。我々のように何泊なんていう形ではない。行きながら感ずるところあれば予定外に、そしてだれかとの出会いがあれば、もう一晩そこに泊まって、そのかわり非常につつましいような、ラーメン食べたりしていますけれども、そのような旅人が多くなるのだらうと思っていますし、そういう人にきちんと対応できなければいけないのだらうと思っています。もう、さあさあどうぞ、こちらというような形の団体旅行というのは少ないのではないかとと思っています。

そして、我々もいろんなところから見てもらえる、歩いてもらえるように、起点から起点というセットの仕方していましたが、その間の道もずっと歩くのですね、外国の旅行者。裏道も歩いたり、それで、物置にしていた縁側をきれいにお掃除して、そこにテーブルとイス出して、やかんを置いて、「水飲んで、どうぞ」と書いている、そんな同級生、大工さんの棟梁ですけれども、そういう意識も芽生えてきたようです。お接待、四国だけではないのですね。そんなふうな環境づくりが大事だらうと思っています。

○佐々木一榮委員長 よろしいですか。時間になりましたので、佐々木所長には本当に本日も大変お忙しいところ、ありがとうございました。

○佐々木邦世講師 どうもありがとうございました。

○佐々木一榮委員長 委員の皆様には、当委員会の運営等につきまして御相談がありますので、しばしお残りいただきたいと思います。

○佐々木邦世講師 言い忘れました。これ今福岡でやっております。昨年11月から1カ月は仙台で、仙台市博物館始まって以来かどうか、大変毎日2,000人以上入りまして、しかもいつも見る、なれた友の会の人ではなくて、おじいちゃん、おばあちゃん、県北の人たちがみんな行ってくれたのですね。ありがたかったです。福岡の人たちも今どんどん招待状出して、岩手の関係者を通じて頑張ってもらって、3月は東京、いよいよ世田谷でやるようなつもりでおります。よろしくどうぞ。

○佐々木一榮委員長 それでは、次に次回の委員会の開催についてであります。次回の委員会開催については世話人会で別途協議し、決定したいと思いますが、よろしいでしょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

○佐々木一榮委員長 それでは、そのようにさせていただきたいと思います。詳細については、当職に御一任をお願いいたします。

以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。本日はこれをもって散会いたします。御苦労さまでした。